

災害避難所に対する避難所未経験者の生理心理反応に関する研究：防災教育手法提案の一助を目指して

岸田, 文

<https://hdl.handle.net/2324/4060243>

出版情報 : Kyushu University, 2019, 博士 (感性学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

氏 名	岸田 文 (きしだ ふみ)		
論 文 名	災害避難所に対する避難所未経験者の生理心理反応に関する研究 －防災教育手法提案の一助を目指して－		
論文調査委員	主 査	九州大学	教授 綿貫 茂喜
	副 査	九州大学	教授 樋口 重和
	副 査	九州大学	准教授 尾方 義人

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本申請論文は、被災後に発生する災害関連死を最小限にするために、避難所に関する防災教育を効率よく行うための教育内容・方法を個人の特性である性格特性の観点から検討したもので、喫緊の課題に挑戦する内容である。

第一章では本研究の背景と目的について述べた。

第二章では市役所を例として、市役所に対する負の印象を評価する方法としてSERVQUAL、因子分析、重回帰分析を性格特性を含めて妥当性があるかを検討した。その結果、上記の各手法は有効であることを確かめた。

第三章では上記分析法を用いて、避難所未経験者がどのような先入観を持っているのか、その先入観にはどのような性格特性が関連するのかを、SERVQUAL、因子分析、重回帰分析により検討した。その結果、避難所に対するネガティブな先入観は「情緒的支援の不足」と「手段的支援の不足」の2因子で構成されること、共感性や誠実性という性格が影響していることを示した。この先入観を減らすためには避難所で発生し得る対人関係上の問題を想像させたり、予め災害時の情報に関して発生した過去の問題点を把握させておくこと等の事前にできる教育が重要であることを示唆した。

第四章では避難所未経験者への防災教育の一つとなる避難所生活を想像させるという教育的介入が、避難所に対する注意処理過程に影響を及ぼすかを脳波の中の事象関連電位 (P300) から検討した。具体的には、被験者にタブレットを用いて避難所生活を想像させる条件(タブレット条件)と他者と対話しながら避難所生活を想像させる条件(対話条件)の2種類の教育的介入を実施した。その結果、「介入前」よりも「介入後」の方が有意に大きい P3a 振幅が得られた。これは「介入後」において標的刺激である避難所画像が被験者にとって重要な刺激となり、注意処理過程を開始させるための注意資源をより多く割り当てたためであると考えられた。さらに、P3a 振幅と性格特性との相関関係を調べた。その結果、認知的共感性または情動的共感性が高い人ほど他者と対話しながら避難所生活を想像した後に、P3a 振幅が大きくなることを示した。

第五章ではこれらの結果を総括し実験の限界と今後の展望について述べた。

1月21日に行われた予備審査では提出された論文の説明を申請者から受けた後、各委員からの質疑等を行った。その結果、学位論文としての研究の独自性と内容が評価

された。なお、審査員から加筆修正部分が指摘されたが、提出期限内に指摘事項の修正は可能であると判断し、審査員全員一致で申請論文は受理できるものと結論した。

最終試験

この論文について、論文調査委員会は、令和2年2月17日（月）16時30分から九州大学大橋キャンパス 524 教室において、岸田氏及び論文調査委員全員の出席により、公開による論文の調査及び最終試験を実施した。

論文内容について、岸田氏は論文調査委員（全員）や公開参加者から用いた統計解析手法、結果の解釈、研究のリミテーションに関する質問があったが、同氏は的確にかつ明確な回答を行った。これらの回答は論文調査委員を満足させるものであったことから、論文調査委員会は最終試験を合格と認定した。

以上のことから、論文調査委員会は、岸田氏が博士（感性学）の学位を授与されるのに相応しいと判断した。